

明治大学外国人研究者招聘制度 報告書

<招聘教授・研究員の情報 / Guest Professor・Guest Scholar>

氏 名	李璐緑
Name	
所属機関(派遣元)	中国人民大学（中華人民共和国）
Affiliation (Home Organization)	
現在の職名	大学院生
Position	
招聘期間（日本への入国日から出国日）	2025年12月1日～2026年8月1日
Invitation Period (from the date of entry to departure)	
専攻	中国史
Field of Research	
ホスト教員氏名と所属学部研究科等	陶安あんど・法学部
Name of host teacher and affiliation at Meiji University	

<外国人研究者からの報告 / Foreign Researcher Report>

①研究課題 / Research Theme
日本所蔵『唐六典』諸版本と日本学界における『唐六典』の研究
②研究概要 / Outline of Research
収集した資料に基づき、日本所蔵の『唐六典』諸版本については、管見の限り以下の通りまとめることができる。日本に所蔵される『唐六典』版本の底本は、基本的に明代の正徳本または嘉靖本を主とし、そのうち正徳本を底本とする日本天保七年官刻本が最も広く流布する刻本である。現存する『唐六典』の校本の中で、広池千九郎点校本は当然ながら最も通行している。また、享保九年の近衛家熙校本（底本は正徳本、嘉靖本を参照）と源信繼校本（版本の由来は延享年間の写本か）との間には、校勘文字の方面で継承関係がある可能性が高い（源信繼校本については、従来は岡野誠先生がその研究プロジェクトで言及するのみであった。ここ一年で趙帥淇博士がより詳細な研究を行い、源信繼が校勘の際に近衛本の説を一部継承したと指摘する。趙帥淇「日本寛政六年源信繼校訂本『唐六典』考」、『域外漢籍研究』掲載予定、を参照）。京都大学蔵の平松家抄本（底本は嘉靖本で、書き手による自校と思われる）については、対照したところ、近衛本との校勘に明らかな共通性は認められないが、それでも看過しえない校勘的価値（特に原文の誤字・訛字の訂正）を有する。 日本の学者による『唐六典』研究は、おおよそ以下の諸類に分けられる。まず『唐六典』の版本および校勘に関する研究として、例えば玉井是博「大唐六典及び通典の宋刊本に就いて」（『支那学』第7巻第2・3号、1934）と「南宋本大唐六典校勘記」（『東方文化史叢考』、1935）、内藤乾吉「『唐六典』の行用について」（『東方学報』第7号、1936）、内田智雄「大唐六典の補訂について—ある批評に答えて」（『同志社法学』第27巻3号、1975）、利光三津夫「『唐六典』の日本における行用について」（『法学研究』第63巻5号、1990）、山口洋「松代文庫旧蔵官版大唐六典について」（『漢籍整理と研究』第11号、2003）などが挙げられる。次に、『唐六典』の編纂過程に関する研究には、例えば榎本淳一「『唐六典』編纂の一断面—重出規定を視点として」（『小此木輝之先生古稀記念論文集：歴史と文化』、青史出版株式会社、2016）、小島浩之「『唐六典』の編纂に関する一試論—『初学記』と『唐六典』の注」（『唐代史研究』第22号、2019）などがある。最後に、『唐六典』と律令制度に関する研究として、例えば三橋広延「『唐六典』と『令義解』に見える「五聽」」（『法史学研究会会報』第11号、2006）と「『天聖厩牧令』の所附唐令によって『唐六典』を訂す」（『法史学研究会会報』第16号、2011）、中村裕一「大唐六典の唐令研究：『開元七年令』説の検討」（汲古書院、2014）などが注目し得る。陶安教授と議論を重ねるなか、『唐六典』研究は『唐六典』それ自体にとどまらず、『唐六典』がどのように制度や政治と結びつくか、例えば『周礼』に比附する政治的象徴的意義や、そこから構築された制度枠組みの意義などにも注視すべきであるといった新しい認識を得た。
③招聘期間中の研究活動の実績 / The research results as Guest Professor・Guest Scholar
「開元制度変革と『唐六典』の編纂」と題する博士学位請求論文の構想を報告し、陶安教授から修正意見をいただいた。陶安教授の指摘に基づき、「唐代齋郎簡試小考—『唐六典』関連記載を出発点として」と題する投稿中の論文の修正を行った。東京大学の小島浩之先生が主催する『唐六典』読書会に参加した。

